
ネギま！ ~至りし者魔法ある世界へ~

フィリス・E・O・ナイトスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！～至りし者魔法ある世界へ～

【NNコード】

N0348U

【作者名】

フィリス・E・O・ナイトスター

【あらすじ】

恋姫の世界を生き抜いた天伎零。その零が『ネギま！』の世界に神の娯楽の為に介入！？

プロローグ（前書き）

フイリスです。恋姫の方もありますが、つい衝動的に書いてしまいました。

かなりのチートになっていますが、そのようなものに否定的ではない方はお楽しみください。

誤字脱字も多く駄文だと思いますが、温かい目で見てください。

プロローグ

この小説では初めまして、あまのきれい天伎零あまのかれいだ。とのんきに挨拶しているが俺ももう九十歳となり、今にも永眠しそうだ。
愛する者たちも一年ほど前に死に、俺は自室で横になつていて周りには俺の子や孫たちがいる。

俺はそんな中、幸せに包まれて息を引き取つた。

……はずだった。

「ん、この空間は……」

何で俺はまたここにいるんだ？

「久しぶりじゃの～」

「お久しぶりです」

「ん、あんたたちは確か……天照大神と駄神？」

「わしの名m「ええ、合つてますよ」ちょっと待たんか！？」

「せうか、合つてて良かつた

「わしスルー！？」

「「黙れ駄神」」

「ひどい。」

あ～あ、落ち込んだよ。

「で、どうして俺はここに？」

「この駄神が他の神と一緒に貴方の人生を覗いていたの。それで面白がったこの駄神が娛樂の為に他の世界にも送り込んじゃったのよ」

「あんの、駄神が……」

碌なことしないな。

「それで貴方を呼んだことに気付いた私が来たつてわけです」

「俺はもうここまま死にたいんだが」

「ここに呼ばれたからにはもう無理よ。まあ、いいじゃない。強さも十分だから、貴方を神にする許可は出てるし」

「そりゃこいつでもな、俺はあいつらのこない世界で過ごすのは嫌だぞ」

「それなら大丈夫です。よほど強く思つてたんですね、魂が半ば融合してましたよ。今は分離させて、肉体を再構成しています。果てしない時間はかかると思うけど、ちゃんと行きかえらしてあげるわよ。神にはできないけど、不老不死にはしておくわ」

「そつか、それならまあいいや」

「わし復活!」といつわけでこのカードを5枚引けい！」

「何だそれは」

「ボーナスといつやしづじや。引いた特典をつけてやるつや！」

「んじゅこれとこれと……これとこれとこれだな」

「ふむ、まず一つ目は、お主が最初に貰った特典に魔法関係を加えることじやな。それと肉体の限界突破。それと鬼巫女の能力とスペルじゅ」

「えつと、『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』だよな」

「んじゅ。残り二つなんじゅがいい方と悪い方先にじつちを聞く」

「いい方で」

「分かつたぞ。いくつか制限は付くが『あつとあらゆるものを探る程度の能力』じゅ」

「それ何でチート? で、制限つてこののは?」

「まず、鬼巫女としての能力を十分使えるよにならんと使えん。それと能力を操って自分の能力を増やすことはできんし、命を生き返らせることはその世界を担当している闇魔に会わんと無理じや。まあ、簡単な概念位なら操れるがな。人の心も操れん。せいぜい話の流れを操るぐらいでじや。それも自分に好意を齎すような方向には操れん。それに操るだけではできんこともあるぞ。」

「『えつと、子供の先生と麻帆良ってことは分かぬ』
『『ネギまー』の世界ですよ』
『『お主の原作知識の一部消去じや』
『まあ、別に今貰つた能力があればいけると思ひナゾ、一部ついてうこつことだ?』
『まあなー』ともあるつてことか。で、悪い方は?』
『まあ、別に今貰つた能力があればいけると思ひナゾ、一部ついてうこつことだ?』
『こんな人いたなあ、とかこんな場所あつたなあぐらいは覚えておるが、こんな歴史の流れだつたなあとか、その人物についての未来などは消去される。せいぜい原作があと何年で何処が舞台かわかる程度じや』
『まあ、その程度ならいいか』
『じゃあ、天照殿。頼むぞい』
『あんたはやつぱりできないんだな』
『はい、終わりましたよ』
『で、次はどの世界に行くんだ?まあ、聞いても詳しい事はもう分らんがな』

「まあ、その前に貴方の基点世界に行つて修行してもらいます」

「その基点世界って言いつのは何だ？」

「基点世界といつのはこの駄神にとつてこの世界のように、そこ
の神が侵入を許さなければ他のどんな神も侵入できない世界です。
駄神が送る世界とはいつでも貴方は行き来できますし、基点世界の
人物も時間制限付きで呼びこむことができます。

また、物語の終焉を迎えると基点世界へと戻されます。その時、送
った先の世界で親密な関係となつた者は基点世界に連れていく」と
ができます」

「へへ。といづことは天照はこの神の許可をもらつてゐるのか」

「ええ」

「で、基点世界つてのはどいもんなん世界なのか？」

「いえ、いのよづに他の者がいない基点世界も珍しいです。私も他
の者と関わりを持たないだけで生物は存在しています」

「そうですね、貴方の基点世界は東方Projectの世界を元にし
たものとしましようか。まあ、その世界の天照と私は無関係ですが」

「自分で作らなくていいのか？」

「ええ。大抵の新しい神は上位の神に基点世界を与えてもらつて、
その世界で修業を積むのが普通ですから。ちなみにいつでも私たち
の名前を呼べば連絡をとれますよ」

「基点世界から私たちが送る世界に跳ばされても、跳ばされた時間軸
に跳べばタイムロス無しで行き来することができます」

「了解。つってもその世界も幻想郷つてのしか覚えてねえけど」

「それが当たり前です。今肉体を再構成してゐる者たちも、終わり次第基点世界に送ります。それでは良い神生を」

「おひ

そつして初めて転生した時と同じく、俺の意識は闇に沈んでいった。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了しました。

おそらく東方の世界での修行の話は別の小説として、一段落したら
になると想います。その時はWikiaのお世話になりそうですが……

でもETSも書きたいし……と色々思つてしまつ立田の頃です。

次回の更新をお待ちください。

ep・? (前書き)

フイリスです。ep・?を更新しました。

()で囲んだ文字は念話、『 』は能力、魔法名、操ったもの、道具の名前などです。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい日で見てください。

鬼神兵を巨兵と書いていたので修正しました。

スペルカードルールから弾幕「」に修正しました。

e p ·?

（零 side）

魔法世界のとある森の空間が突然裂けた。

「うーん、いつ開始なのかと思つてたけどやつとか……って縮んでるー？」

（うつこいじとだ！？俺の姿は20歳で固定だったはずなのに。

（あー、聞こえる？）

（天照か。どうなつてんだ、これ？）

（知識がない貴方に教えておくと原作の20年前、大分裂戦争中の魔法世界よ。貴方の姿は3～4歳つてところかしらね）

（なんでそんなことを？）

（その方が面白いからつて駄神がね）

（……あの野郎）

（まあ、いつ成長を止めればいいかは教えるわ）

（了解）

俺は基点世界で何億年も過ごした。それこそやがて月人と呼ばれる

者たちが地球にいるころから、幻想郷ができ何百年も経つまでだ。

おかげで貰つた『ありとあらゆるものを操る程度の能力』も使えるようになつたし、愛した者たちの肉体の再構成も終わつて、共に過ごしていた。

ちなみに魔法の知識はあつたので、この世界の技術らしい本契約をハ雲紫と済ましている。

人間だつたころからの付き合いだつた彼女たちと揉めたが、弾幕ごつこで紫が勝つたので文句も言えなくなつた。

まあ、その後に仮契約を結ばれたけどな。というか本契約の相手を選ぶための仮契約のはずなのに何でできたのかいまだに不思議だ。そして、俺の魔法適性は、水、氷、風、雷、火、光、闇だ。まあ、パチュリーと同じ『火 + 水 + 木 + 金 + 土 + 日 + 月を操る程度の能力』を使えば、地の系統も使えるんだけどな。

まあ、基点世界でのことはまた別の話だ。ちなみに、俺のカードのローマ数字は1、色調は銀と虹、徳性は信仰、星辰性は恒星天、方位は中央、

称号は『最強にして最凶にして最恐の幻想』、アーティファクトは『幻想の絆』だ。この『幻想の絆』は自分と自分の従者に咸卦法を使つているのと同じ効果を付与し、

心を通り合わせ、お互いが何を思い、何をするかがわかるようにするものにし、能力も共有できるというものだ。さすがに同じ世界にいるという縛りはあるが。

まあ、能力が能力だし仕方ないのかなあ。と、そんなことを考えていると、遠くにでかい鬼のようなものが見えた。確か鬼神兵だつた

な。とりあえず近寄つてみるか。

そう思い俺は空を飛んでいく。「なんこと魔力や神力などを操れば簡単にできる。

＼ side end＼

＼???? side＼

俺は紅き翼のリーダー、ナギ・スプリングフィールドだ。今俺たちは王都を強襲していむ帝国軍から黄面の姫御子を守りうつと急いでやつてきたところだ。

いくら完全魔法無効化能力があるとはいへこんなガキまで戦争に連れ出さなきゃなんねえのが気に食わねえ。

「ナギ、あれを！」

「あ？ どうした、アル……ってなんであんな小せえガキが！？」

「わかりません。ですが早く助けて差し上げないとやばいですよ」

その瞬間、帝国軍はそのガキに気付いたのか、鬼神兵で狙いやがった。詠唱が間に合わねえ！ 俺はあのガキを助けられないのか！ そう思ったその時、ガキがいきなりでかい技を放つて鬼神兵の上半分を消失させた。

＼ side end＼

＼ 零 side end＼

俺が空を飛んでも、鬼神兵がいきなり俺を狙つてきやがつた。あんまめんどい事はしたくないんだがな。

そう思いつつ俺は魔理沙の得意とする魔法をぶつ放す。

「恋符』マスタースパーク』！」

……やべえ、上半分が消し飛んだよ。

「おー、そこガキ！大丈夫か？」

お前の方がガキだ」……つてそつだつた。今俺若返つてゐるんだつた。ん、こいつ確か原作にいたような気がするぞ？確かにナギだつたか。

「今のどこに怪我する要素があるんだ？」

「はつ、ガキが言つじゃねえか！」

帝国軍もやつと立ち直つたのか俺を狙つて攻めてくる。面倒だし、一気に消すか。

俺は制限により、フランと同じ『あつとあらゆるもの破壊する程度の能力』自体は使えない。

しかしあれは打撃による破壊活動ではなく、全てのものにある力を加えれば破壊できる『田』があり、

離れた目を自分の手の中に移動させ強く握ることで破壊してしまつ
能力だ。

ならば俺の眼の『波長』を操つて『田』を見えるようじ、『田』『田』

を操つて手の中に移動させてやればいい。

これができるようになるのは時間がかかつたができるようになつ
た。

俺はそつこで自分の手の中に全ての鬼神兵の『皿』を移動させる。

「やめとしてドカーンー！」

その言葉と『皿』を握りしづぶす。するとその「じ」とくが爆破された。

「戦闘終了」と

すると、ナギ？が話しかけてきた。

「お前強いなー俺はナギって言つんだ。俺の仲間になんねえか？」

「ナギ、何を言つてるんだ！ いくら強いとは言えこんな小さい子を……」

やつぱ、ナギだったか。つか俺を勧誘したのか、コイツ？

「俺は自分より弱い者の下に着く気はない」

「何だと？ めえーそんなこと言つながらこれを受けてみやがれー！」

うわ、沸点低っー！ というか『雷の暴風』なんか撃つてきやがった。まあ、このぐらいなら大丈夫なんだが。

俺は『魔法を発動させている精霊』と『発動させるために使った魔力』を操つてナギの魔法を無効化する。

「なー？」

「弱すぎると。それはこいつ使つんだ。『雷の暴風』」
俺はナギに向かつてだいぶ手加減した『雷の暴風』を放つ。それは
いともたやすく障壁を破り、ナギに直撃した。

「じゃあな

俺は『視力』を操り一番近くの大きな都市を探す。

「……ま…て。お前は何て言つん…だ?」

俺は称号と共に名だけを名乗る。

「『最強にして最凶にして最恐の幻想』、零だ」

そうして俺は見つけた都市に向かつて『距離』を操つて移動した。

↓ side end ↓

ep・?（後書き）

ep・?終了しました。

こちらの話ではタグについていない、ネギま！か東方以外の技が出てきた場合に技の説明をします。

次回の更新をお待ちください。

e p . ? (前書き)

フイリスです。パソコンが使用不能になり、携帯からの投稿になります。使用可能になるまで更新速度が落ちると思いますが、ご容赦ください。e p . ? を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしませんが、温かい目で見てください。

俺はナギを倒した後、色々な戦場に介入していた。連合の味方をしたり、帝国の味方をしたり、時には両方とも殲滅したりしていた。能力も使つたりしたので、色々な一つ名がついた。『幻想神』といふのはいい。あながち間違いじゃ無いからな。だけど『ねえ、バグなの！？』とか『俺、生きて帰れたら結婚するんだ……』って何！？俺は死亡フラグだつて言いたいの！？

まあ、過ぎたことを悩んでもしようがないか。……『幻想神』って言い易いな。これからはそう名乗ろっど。本当は基点世界で呼ばれてる『操神』って名乗りたいけどね。つか、流れを操つて情報を集めたら裏コズモエンタレケイアで糸を引いている組織の存在を知った。何でも『完全なる世界』コズモエンタレケイアというらしい。その内叩き潰しにいくか。そういう考えてる内に、俺は目的地であるグレート＝ブリッジに着いた。

「お～やつてるね～」

俺の目の前では連合と帝国が戦っている。

「んじや、今日は両方とも叩き潰すとするか」

俺は光を操つて自分の周りを迂回するようにねじ曲げて擬似的な透明人間になり、両軍の中間まで飛んでいつて、呪文を詠唱し始めた。

「ノクト・シュヴァルツ・ウイング・ロード。契約に従い、我に従え、漆黒の王。来れ、無より生まれし原初の闇。闇より暗き深淵よ

り出で来る其は、科学の光が落とす影なり。『黒神の左腕』！

俺の魔法で両軍の兵が次々と死んでいく。

「おいー。」

「ん？」

「こないだはよくもやつやがったなー。」

「おいおにナギ。お前こんなガキにやられたのかよ

「ひっせーよ、ラカンー。」

「悔つてはいけませんよ、ラカン。この子が有名な『幻想神』なのですから」

「はつ、どうせ噂なんてアタラメだろ。行くぜー。」

そう言ってラカンが襲い掛かってくる。まあ子供の姿になつてはいるが、別に力は弱くなつてゐわけじゃないし平氣が。俺は溜息を吐きながらラカンの拳を受け止める。

「なつー?」

「熾撃『大鵬墜撃拳』」

俺の攻撃に耐えられなかつたのか、ラカンは飛んでいく。その瞬間、俺の左側から氣を感じた。

「神鳴流奥義、『斬空閃』！」

集めた情報から判断すると詠春という奴だと思われる剣士が突っ込んでくる。神鳴流の技だからおそらくそうだろう。俺は『境界』を操り『スキマ』から『窮』を取り出して抜刀する。

「いつやつてるのか？『斬空閃』！」

『斬空閃』のやり方は知っていたが、さもその場で見取ったかのように振る舞う。俺の放った『斬空閃』は相手の『斬空閃』を切り裂き詠春に当たる。とりあえず切れはしなかつたが、戦闘不能になつたようだ。そして俺は残り、ナギとおそらくゼクトとアルビレオだと思われる奴らを倒そうと呪文を詠唱する。

「ノクト・シュヴァルツ・ウイング・ロード。契約に従い、我に従え、純白の王。来れ、無より生まれし原初の光。闇より深き深淵より出で来る其は、科学の幻影かけを裁く剣なり。『白神の右腕うわん』！」

残りの3人も俺が放つた魔法により気絶する。

「もつと強くなれ。そうすれば、一撃くらい当てられるかもね」

正直言つて、俺は強くなりすぎた。これに神としての力を使うと勝つのは絶望的になる。俺を神にした天照大神が『与奪を支配する力』を持つていたように、駄神が『自然を支配する力』を持っていたように、俺は『未来と固有空間を支配する力』を持っている。『未来支配』は全ての可能宇宙・多元宇宙の未来を支配することにより相手の行動を先読みすることができるものであり、『固有空間の支配』は相手が作り出した固有領域を言語化してその空間を支配するものである。こんな勝てる奴いるのかねえ？

ま、いつか。取りあえず集めた情報の中に「こんな奴原作にいたな
」って感じがする奴のことに行こう。俺は『スキマ』を開き、ウ
エスペルタティア王国の王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュ
シアのもとへ向かった。

＼ side end＼

＼アリカ side＼

「はあ……」

今起じつている戦争のことを思つと溜息がでる。私も調停役となり
戦争を終わらせようとしだが無理じゃった。どうもこの戦争はどこ
か怪しいところがある。まるでわざと引っ引かせようとしているみた
いじや。そんなことを考え再び溜息を吐きそうになつたそのとき、
私の目の前の空間が割れた。

＼ side end＼

＼零 side＼

ようやくアリカ王女が見つかったのでその目の前に『スキマ』を開
くと、目を見開き今にも叫びそう……ってやばい！今の俺つて不法
侵入者じゃねえか！俺は急いで『アリカ王女の声帯』を操り声が出
ないようにした。

「…………？」

驚いてるなー。とりあえず落ち着かせるか。

「まあ、落ち着け。別に俺はあんたを殺しに来たわけじゃない。あんたが盤上の駒なのかそつじやないのか、確かめに来ただけだ。」

俺がそつじひと一気に田の色が変わった。……話はできそつだな。能力を解除したことを分かり易いようファインガースナップで伝えてやる。

「主^{ぬし}が『幻想神』か? 一体何をしたのじゃ?」

「一つ田の質問については肯定。二つ田のは秘密だ」

「なり、」の戦争は裏で糸を引いている者があるのか?」

やつぱり気付いてたか。及第点だな。

「ああ、こねぞ」

わい、」のどどひこひ反応を見せるのかな?

「……ならば私に力を貸してはくれんか?」

「王女としての命令にしなくてこいのか?」

「私が今そんなことを言える立場でない」ということわかつておるわ

……くえ。

「俺は自分より下の奴に従うつもつは無い。あんたは何を持つてそれを示すんだ?」

「私は未来のこの国の女王となる感じじゃ。故に私は強者ではなく、王となる者の才覚と振る舞いで示そひ」

そう返すか……。

「あんたは強くはない。だけどあんたの言つ通りあんたに必要なのはそれだ。そしてあんたは自分の立場が分かるだけの判断力を持つてるし、歴史や伝統を重んじる国にしては珍しい人に頼み込むといふことができる。十二分に合格だ。俺の力を貸そうじゃないか。俺のことは零と呼んでくれ」

「わかった。して、零よ。裏で糸を引いているのは誰なのじや？」

「完全なる世界といつ組織。世界を終わらせるのが目的だ。連合や帝国の上層部は勿論、このウェスペルタティアにもシンパがいる」

「やうか。ならば紅き翼に会ってこべや」

「なんで？あいつら弱いぞ？」

「それは主に比べたらじやろ？それに數は多くて困る」とはないしの

の

「有ると思つゞへフレンダリー・ファイヤーとか

「ぬぬ腕くらこあるじやね……」

「まあ、やうなんだけだな。んじや紅き翼に連絡よつし。俺は護衛としてつこて行くよ」

「ふむ、それならマクギル元老院議員殿かの」

そしてその5日後、俺とアリカ王女は紅き翼に会いに向かった。

{ side end }

ep・?（後書き）

ep・?終了しました。

今回出てきた技はこちらです。

- ・黒神の左腕：オリジナルの闇属性の超広範囲殲滅魔法。自分から半径2？以内の任意の座標から半径100フィートの範囲に超重力を発生させ、動きを止めた所を闇で呑み込む。大抵の者は超重力により圧死し、闇に呑まれば一度と戻れない。使用者の力量により、対象の選択が可能。

- ・白神の右腕：オリジナルの光属性の超広範囲殲滅魔法。使用者の前方に特大の斬撃を模した光をいくつも飛ばす。その光は物理的、魔法的防壁を素通りし、果ては異空間にいる対象まで攻撃を加えられる。使用者の力量により、対象の選択が可能。

次回の更新をお待ちください。

ep・? (前書き)

遅くなりました、フイリスです。ep・?を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい目で見てください。

e p ·?

（ナギ sides）

俺たちは今ガトウに呼ばれて連合の首都に来ている。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「会つて欲しい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

「マクギル元老院議員ー。」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

マクギルのおっさんが示した方を見ると、こちらで二人歩いてくるのが見えた。

「ウエスペルタティア王国アリカ王女と、その護衛の零殿だ」

「なつ、てめえ！ 何でここにいやがるー！」

ラカンが騒ぐのももつともだ。なぜならそこには、この前俺たちが負けた『幻想神』がいたんだからな。

（side end）

はあ、会つた瞬間罵倒してくるとか馬鹿なのか、……つて馬鹿だから
こんなことすんのか。……ん、この気配は。

「姫さん、交渉は任せた。俺は周りを見てくる」

（それと俺の家名は言つなよ）

（なぜじや？）

（大人になつた時に騒がれたくない。零だけだつたらそう珍しい名
前じやないからな）

「あつ、手前何処に行きやがる！」

「お前は馬鹿か、筋肉野郎。周りを見てくるつて言つただろうが」

そう言い放ち、気配の主の下まで飛んで行く。

「やあ、初めましてかな？『幻想神』」

「そう言つお前は確か造物主の人形の一^{ライフメーク}番目だつたか？」^{ブリーム}

「……君は何故、いや何処まで知つているんだい？」

「ん？ お前らがこの火星に作られた世界を無に帰そうとしている
事位だが？」

「……君は危険だ。」
『逆させてもいいわ』

「まつ、できるものならやつてみな

そつ言つて、一番田が魔法を使おうとしたといひて俺は『マスター
スパーク』を何本も打ち込む。

「くっ…」

「これで終わりだ、魔砲『ファイナルスパーク』」

『ファイナルスパーク』は一番田に直撃し、煙に包まれる。

「はあ、はあ。今のは危なかつたよ。今日の所はひとまず退散させ
てもううとしよう」

「やうかい

そして一番田は転移して逃げていった。さて、俺も戻るとするか。

「終わつたか？ 姉さん」

「うむ。して零よ、お出はせに行つておつたのじや？」

『今しお』完全なる世界』の幹部と闘つて撃退したと

「やうであつたか。零よ、とつあえず戻るわ』

「了解

あれからしばらく経つて、俺とアリカ王女は帝国の第三皇女と話し合つたために会合場所まで来ていた。『紅き翼』はこないだアリカ王女がお忍びでナギと出かけたときに見つけた証拠を法務官ブロードトルに提出しに行つている。

「私がウェスペルタティア王国王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアじゃ」

「妾はテオドラじゃ。で、そつちの子供は誰なんじゃ？」

「『幻想神』零だ」

「なつ、こんな子供がじやと…？」

「お前も子供だらう」

「テオドラ皇女、話を進めてよろしくか？」

「う、うむ。して、『完全なる世界』とこつのがこの戦争を裏で操つているところのは本当なのか？」

「そうだ。今も5人ほど此処にいるな」

俺がそう言つと3人が護衛を殺し始め、2人がアリカ王女とテオドラを攫おうとしてきた。俺は『スキマ』でテオドラを近くに移動させた。

「『操神結界・開幕』」

俺が張る結界の中でも最弱の物を展開する。

「何だ、近づけないぞ！？」

「『魔法の射手、闇の5矢』」

俺は敵が戸惑っている内に『魔法の射手』を放つて殺す。それと同時に『流れ』を操って、情報を集める。

「さて、姫さん。どうするんだ？ ナギ達の方も『完全なる世界』に嵌められた様だぞ」

「ならば、夜の迷宮に行へば。あの中は魔法が使えんからの

「了解。ナギには連絡をしておく。で、テオドラ。お前は一緒に来
るのか？」

「妾を呼び捨てにするなー！」

「五月蠅い。で、どうするんだ？ このままだとまた攫われそうにならぬぞ」

「むう、じょうがない。ならば案内するのじゃ

「へいへい

俺は『スキマ』を開いて夜の迷宮に移動する。

「うむ、流石は『幻想神』、夜の迷宮でも力を使えるか」

「当たり前だ。さて、『紅き翼』が来たら起^{ハシ}してくれ」

「分かつた」

卷之六

「ん、
来たのか。
で、
何処に向かうんだ？」

「了解。なら、他の奴を呼んでくれ。一気に移動する」
「タルシス大陸極西部のオリンボス山にある隠れ家だそうだ」

۱۷۴

そして皆が揃い、俺は全員を『スキマ』で飲み込む。

「な、一気に転移しやがった！」

「正確には『空間の境界』を操っているんだけどな」

「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば掘立小屋ではないか！」

「当たり前だろ、こいつらは逃亡者なんだから」

「我が騎士よ」

「『我が騎士』って何だよ、姫さん」

「連合の兵ではなくなったのじゃ。ならば私のものと言ひことだ。零から世界全てが敵だということは聞いた。じゃが、主と主の『紅き翼』は零を除けば無敵なのじやう?」

「あのなあ、やつこいつ時は『零を除けば』何ていわないでくれるか?」

「事実じゃ、諦める。まあ、例え世界全てが敵でもこちらは最強の8人なのじや。ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ。そして零よ、これからも私に力を貸してくれ」

「やれやれ、おつかない姫さんだ。いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう」

「姫さん、あんたが王としての器を俺に見せ続ける限り、あんたに力を貸すことを『幻想神』の名の下に誓おう」

そして、俺達の反撃が始まった。

ep・?（後書き）

ep・?、終りました。

今回出てきた技はこれ位です。

- ・操神結界・開幕……オリジナルの結界。開幕と言うのは結界の分類。開幕く本章く終焉の順に強度が上がっていく。開幕は魔法的、物理の一重結界。

次回の更新をお待ちください。

ep・? (前書き)

フイリスです。ep・?を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれません、温かい目で見てください。

反撃を開始して4カ月、俺たちは墓守り人の宮殿で最終決戦を始めようとしていた。

「さて、いつちょうどやりますか」

「だな、零。それにしても不気味なくらい静かだな」

「舐めてんだるうよ、俺達のことを」

「ナギ殿！ 帝国・連合アリアードネー混成部隊、準備完了しました！」

「おひつ、分かつた」

「それですね、ナギ殿。それと零殿も。サ、サインをお願いできないでしょうか？」

「ああ？ ああ、それ位いつでもいいぜ」

「そ、尊敬していました」

「俺もいいが、そんな浮ついた気持ちだと死ぬぞ。戦争ってのはそういうもんだ」

「は、はい！」

「タイムリミットだ、ナギ。正規軍の説得は間に合わない。すぐに

始めよつ

外には大量の召喚魔か。よし、俺が行くか。

「ナギ、外は俺に任せてお前は姫御子を助けに行け」

「ああ、分かった。でもどうやって道を開けるんだ？」

「どれ位倒せるかは分からないが、俺の選定の技を使う。残った奴は俺が叩き潰すし、後から湧いてきた奴は混成部隊に叩かせる」

そして俺は部隊の少し前に浮かぶ。

「必然『キングクリムゾン』『..』

俺が技を放つと同時にほぼ全ての召喚魔が死んでいく。残ったのは1体だけか。資格がない奴らが多過ぎだろ。残っているのは感じる力的に公爵級だろつ。

「おい、零。何したんだ？ もう1体位しか残ってないんだが

「時間を十数秒消しおつて即死攻撃を喰らつたと言つ結果を残しただけだ」

「ひ、流石バグキャラ」

「早く行つて来い。俺はあいつの相手をするか」

そう言い残し、俺は『スキマ』で召喚魔の前に移動する。

「……貴様、何者だ

「これから死ぬ奴に教える名前はねえよ」

「貴様、我を魔王サタンと知つての狼藉か！」

「知らねえし、どうだつていい」

「死ね、小僧！」

「お前がな、『黒神の左腕』^{（デウス・エクス・マキナ）}、『白神の右腕』、術式統合『機械仕掛けの神』」

魔法を発動させると幾つもの腕が現れる。そして、その腕がサタンに触れた瞬間、サタンの体が半透明になり砂が溢れ落ちる様に崩れていく。

「我に何をした！」

「死ぬがいい、魔王よ。混成部隊の奴ら、後は任せた。俺はナギ達の方に行く」

俺が『スキマ』を使って移動するとナギ達が血だらけになつて倒れていた。

「何があつた？」

「造物主の攻撃を喰らつてしまつたのですよ」

「あんな雑魚にか」

「ほひ、大口を叩くではないか。」の鍵を見ても同じ事を言えるかな？」

「それがどうした」

「」の鍵はある神話に出てくる宝具を改造した物なのだ。その宝具とは銀の鍵。連なる時空の門を開けられる私には触れる」とすら叶わんぞ」

「それはどうかな?」

俺は縮地で近づき造物主を殴り飛ばす。

「何故私に触れられるー。」

「俺もその鍵と同じようなどができるからな。同じ存在なら触れられるんだよ」

「なつ、人がそんなことできる筈なかろひー。」

「事実を認める。魔神『死狂い』」

「私を倒すか人間。それもよからうシ—私を倒し英雄となれ。羊達の慰めともなる。だが努力^{あつめ}忘れるな。最善の解など無い。私の語る永遠こそが唯一の次善解なのだ」

「うわやうわや五円蠅いんだよー 絶望『鮮血の結末』ー。」

「ぐおおおおおつー。」

「造物主。例えお前が世界を造れようが幻想には敵わない」
「俺の放つた攻撃が治まると光球が生まれ大きくなり始める。

「儀式は完成済みだつたか。つとあれは」

「全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め！ 魔導兵団、大規模反転封印術式展開！ 全力を尽くすのだ！」

「ま、これにて一件落着……とはいきかないんだろうな。

造物主との戦いが終わって、結論から言つと世界は救われた。そして今はその表彰式だ。俺は参加せずに遠くから眺めてるんだけどな。
「我が騎士ナギよ、よくぞ世界を救つてくれたな」

「ま、零に助けられた部分も多いけどな」

「そう言つでない。確かにお前は世界を救つたのだからな。ところ
でその零はどこに行つたのじや？」

「ああ、あいつなら『俺は表彰されたくてやつた訳じやない。称号
もいらない』って言つてたぜ」

「ぶつちやけ』立派な魔法使い（マギスティル・マギ）』つて元老院に
都合のいい駒にしか思えないしな。

「ん？ 大気中の魔力が減少してゐるな。……なるほど、あの術式にはこんなデメリットがあつたのか」

さて、オステイアの中心はどのあたりか。俺は直ぐ様それを調べ、『スキマ』で向かう。到着してしばらくすると、オステイアの崩落が始まった。

（お～い、姫さ、じゃなかつた。女王さん。）

（何じや零！ 今忙しいのじやー！）

（お～お～、忘れたのかよ。俺は魔法が使えない空間でも能力を使えるんだぜ）

（まさかお主ー！）

（じや、移動させるぜ）

俺は靈力を放出してまだ残つてゐる民達の居場所を特定、『スキマ』で安全なところまで移動させゐる。

（これでもう大丈夫だらう。じゃあな）

（待て、零よー！）

俺はアリカ女王の制止を無視して『スキマ』を開く。……旧世界にでも行くか。

- - - - -

えへ、旧世界に来たのはいいが、俺の田の前では少女とそれを追いかけまわしてゐる大人達がいる。

「おい、変態共、止まれ」

「ああ？ つて『幻想神』殿！ 私は変態ではありません！」

「少女を追いかけまわしているのに説得力がないぞ」

「少女は少女でもそいつは真祖の吸血鬼なんですよー」

「それが？」

「それがって言われても、吸血鬼は悪なんですよー。」

「何で？」

「血を吸うからですよー。」

「それはただの食事。俺達が野菜や肉、魚を食べるのと変わらない

「そ、それにも殺していますしー。」

「お前はただ食事をしただけなのに命を狙われても反撃しないのか？」

「う、うう」

「はい、時間切れ」

俺は『スキマ』を開いてそいつらを遠くに移動させる。

「大丈夫だったか？」

そう少女に尋ねるが返事は返つてこない。

「お~い、聞いてるか？」

「お

「お?」

「お前、私のモノになれ！」

いきなりの過激発言！？

／吸血鬼 side／

ちつ、今田は付いていない。魔力がほとんど残っていない時に襲撃されるとは。

「おい、変態共、止まれ」

ん、あいつは誰だ？

「ああ？ つて『幻想神』殿！ 私は変態ではありません！」

『幻想神』つて……」いつがか！？ もうといつか奴だと思つて

いたな。

「少女を追いかけまわしているのに説得力がないぞ」

……なぜあいつは私の味方をしているんだ？ もしかして私を知らないのか？

「少女は少女でもそいつは真祖の吸血鬼なんですよ！」

そうだ、私は真祖の吸血鬼なのだ。それを知ればこいつだって敵になれ？

「それが？」

え？

「それがって言われても、吸血鬼は悪なんですよ！」

「何で？」

は？

「血を吸うからですよー。」

「それはただの食事。俺達が野菜や肉、魚を食べるのと変わらない

な。

「そ、それにも殺していますー！」

「お前はただ食事をしただけなのに命を狙われても反撃しないのか

？」

何が起こっているんだ！？

「う、うう」

「はい、時間切れ！」

「こいつ馬鹿なのか？」

「大丈夫だったか？」

「こいつは真祖の吸血鬼になつて、初めて私に存在を肯定してくれた。なぜだか私はこいつの傍にいたいと思っている。こいつなら強さも問題ないし、私の従者にも相応しい。そうと決まれば！」

「お~い、聞いてるか？」

「お」

「お？」

「お前、私のモノになれ！」

絶対にお前を手に入れる！

（side out）

何でもこの少女はエヴァンジエルンと言づらしく、吸血鬼になつて初めて存在を肯定してくれた俺と一緒にいたいのだとか。そういうや、

「こんな奴原作にいた気がする。

「とつあえず断る」

「何故だ！」

「いや、お前子供だし」

「お前の方が子供だらつー。それに私はいつ見ても600年以上生きてるんだぞー。」

俺は億単位で生きています。

「とつあえず

「?」

「逃げるー。」

「あ、ちよつと待てー。」

俺は『スキマ』を使ってなるべく遠くに逃げた。

エヴァンジロリンと初めて会ってから2年、魔法世界に行くと、今田アリカ女王が処刑されるらしい。いつものように情報を集めると、元老院に嵌められたことが分かった。

「とりあえず助けに行きますか

俺が『スキマ』を開いてケルベラス渓谷の谷底に向かうと、ナギがアリカ女王を横抱きにしていた。

「れ、零！？ 今まで何してたんだよ！」

「お主、何処から！？」

「悪い、女王さんが処刑されるの今日知った。今までエヴァンジエリンに追われててな。魔法世界で紛争地域で活動しても、エヴァンジエリンばかり気にしてた」

俺は2人と話しながら曲絃糸を張り巡らせる。

「ま、とりあえずこれは雇い主のアフターケアみたいなモンだと思つておいてくれ」

言い終わると同時に、張り巡らせた糸で魔獣の首を落としていく。

「じゃあな。縁があつたらまた会おうぜ

俺は『スキマ』の中に入つて次に何をするか考える。

「1人で旅すんのに飽きたしな～。かと言つてエヴァンジエリンと一緒に嫌だし……そうだ！」

俺は一つの考へに思い至り実行するために『スキマ』から出た。

ep・? (後書き)

ep・?、終りました。

零は『スキマ』を多用しそぎている気がしますね。

今回出てきた技はこいつです。

- ・機械仕掛けの神……幾つもの腕が現れ、触れたものの存在を否定し、消滅させる。

次回の更新をお待ちください

ep・? (前書き)

フイリスです。ep・?を更新しました。

ネギまの方の筆が進むので連投です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしませんが、温かい田で見てください。

俺は考^えを実^現するため^に、開けた土地と近くに森がある海岸沿いに來^{ていた}。俺が今から俺が行^うのは、サー^ヴアン^ト召喚とサモン・サー^ヴアン^トを複合させた従者の召喚と、仮契約とコントラクト・サー^ヴアン^トを複合させた魔力バスの形成だ。

「我が名は天伎零。五つの力を司るペントagon。我の運命に従^{さだま}いし、使い魔を召還せよ。素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我、『操神』天伎零。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返すついに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「Anfang
アーフアング

「告げる」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従^い、この意、この理に従^ならば應えよ」

「誓^いを此處に。我是常世總ての善と成る者、我是常世總ての悪を敷く者。汝三大の言靈を纏う七天、抑止の輪より来れ、天秤の守り手よー」

呪文を唱え終わった瞬間、魔法陣の上に二つの魔法陣が展開される。

「「サー・ヴァント、セイバー（ファーネー・ヴァンパン）。召喚に応じ（応じて）参上した（したわ）。……問おう（一つ聞くけれど）、貴方が私のマスターか（かしら）」

「「つて、何故（何で）私以外のサー・ヴァントがいるのですか（いるのよ）…。」

「まあ、聖杯戦争と関係ない召喚だからな、これ」

「「エリート」とですか（よ）…。」

「その説明は後だ。雰囲気からしてお前は吸血鬼だろ？　とりあえず吸血衝動を無くしてっと」

『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』を発動して吸血衝動を消し去る。長年使つことで理解したんだが、『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』は無理が通れば道理が引っ込むの究極形ともいえる物だった。要するに無理（我）が通れば道理（干渉）が引っ込むことだ。

「何馬鹿なことを言つた、本当に無くなつた…？」

「それで人を襲う心配はないだろ」

そう言つた瞬間近くの空間が歪みだし、様々なサー・ヴァント達が出てきた。

「何故召喚もされていないのにこんなにサー・ヴァントが！」

「おやり世界がお前達を取り返しに来たんだろ？　お前達はサー

ヴァントなんだから

「それに私は真祖の姫だしね~」

「真祖の姫? まあ、それはおいおい聞くとしてとりあえずあいつらを倒しますか」

「一応手伝いましょうか?」

「いや、いい。まだ完璧に魔力バスを繋いだ訳じゃないしな」

「そりなの?」

「ああ、いろんな魔術や魔法の体系を混ぜたからな。それにお前達のマスターである俺の強さを見極めるいい機会だろ?」

俺はそう言って神力の封印を外す。封印はこの世界に来て直ぐに力を隠すために行つた。封印を解いたのは、おそらく向こうはクラスに縛られていなかろうからだ。そして封印が解かれると俺の姿に変化が起つた。

「マスターの体が大きくなつた?」

「それは違う。元々この姿だったんだがとある理由で子供の姿になつていただけでこれが本来の姿だ。それとお前達、俺の名前は天伎零だ。ちゃんと名前で呼んでくれ

さて、戦闘開始と行きますか。

「まずはこれからだ。必然『キングクリムゾン』!」

その攻撃で死ぬとまではいかないまでも、ほとんどのサーヴァントが行動不能にまで追い込まれた。残った奴らの情報を集めると、残りはギルガメッシュ、ヘラクレス、エミヤ、クー・フーリン、イスカンダル、呂布位か。呂布と言えば、恋を思い出すが、どうやら別人のようだ。

「何をしたかは知らんが、このイスカンダルが倒してやるう！」

イスカンダルがそう言つと急に神牛ゴルディアス・ホイールが牽くチャリオットが現れる。ふむ、『神威の車輪』と言つのか。

「『遙かなる^{ヴィア・エクスブグナティオ}蹂躪制霸』！」

物々しい技名がついてるからどんな攻撃かと思えば、ただの突撃かよ！

「氣、魔力、靈力、妖力、神力。合成、『太極法』」

強化した腕で突撃を受け止め、イスカンダルと『神威の車輪』の『目』を移動させる。

「きゅっとしてドカーン」

その言葉と共にイスカンダルと『神威の車輪』は爆発する。

「その心臓、貰い受ける！　『刺し穿つ死棘の槍』！」

俺の心臓へ放たれた刺突を左手の人差し指と中指だけで受け止める。

「な、因果はきちんと逆転されていた筈だぞー。」

「俺の能力の一つ、『あつとあらゆるもの操る程度の能力』。この能力で『因果』を操らせてもらつた」

俺は『スキマ』から竜と演を取り出し、クー・フーリンの首を刎ねる。

「So as I pray, unlimited bl
ade works」

その瞬間、世界が塗り替えられる。

「『』覧の通り、貴様が挑むは無限の剣。剣戦の極地！ 恐れずして掛かつて来い！」

「『固有結界』^{リアリティ・マープル}か。ならば俺はその世界すら支配しようつ

俺が手を握り込むと、『固有結界』が音立てて壊れる。

「『固有空間の支配』。これもまた、俺の能力の一つだ」

「下がつていろ、鍊鉄の英雄よー。」

「『射殺す百頭』^{ナイシライブズ}！」

対人用の『射殺す百頭』^{ナイシライブズ}が放たれるが、竜と演を超高速で動かし、全てを受け流す。

「『溟穹一閃』！」

数多の殺しの概念を持つ穹と溟に『太極法』と同じ強化をして繰り出される斬撃がヘラクレスを襲う。

「……よもや、たつた一度の攻撃で全ての命を失う日が来ようとは」

「^{トレース}解析、^{オン}開始。なつ、解析ができないだと…」

「当たり前だ。俺が神になる前、人だった時からずつと一緒に戦ってきた武器だ。既に神器へと至っている物を、英雄程度が解析できる筈がない」

そのまま縮地で近づき、首を刎ね飛ばす。

「『天の鎖』!^{エルキドウ}

その言葉と共に、俺の体が鎖に縛られる。

「自分が神であることをばらしたことが運の尽きだ、雑種!」

「『軍神五兵』!^{ゴッド・フォース}

拘束されている俺の不意を突こうとしたのか、呂布が後ろから攻撃を仕掛けてくる。俺は穹を回転させ『天の鎖』^{エルキドウ}を断ち切り、拘束を解いて反転、方天画戟ごと呂布を切り捨てる。

「『あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力』と『未来の支配』。未来を知る俺に不意打ちは効かないし、抑止力ですら俺を縛ることはできない」

「ちつ、『天地乖離す開闢の星』！」

世界からのバツクアップを受けているのか直ぐ様『天地乖離す開闢の星』^{エヌマ・エリシュ}を打ち込んでくるギルガメッシュ。

「『操神結界・本章』」

俺は中程度の結界を張り、その攻撃を防ぐ。

「『絶望・鮮血の結末』」

紅き雷が幾つも降り注ぎ、行動不能になつていたサーヴァント^ジとギルガメッシュを殺し尽くす。

「英雄達よ。例えお前達が伝説にならうが幻想には敵わない」

そして俺は再度神力に封印を施し、呆けている2人の下に向かった。

「呆けている所に悪いが、契約を済ませてもらうぞ。我が名は天伎零。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与える、我の使い魔となせ。仮契約」

俺は少し浮かんで2人に口付けする。

「「一ツ！」」

あ、2人とも真っ赤になった。

「「いきなり何をするんですか（するのよ）ー。」」

「契約を完了させただけだが？」

「あ、本当ね。魔力バスがさつきより強力になつてゐるわ」

「ええ、そうですね。ですが、許可なく口付けをするのは頂けません」

「そりや、悪かつたな。はい、これがお前等の仮契約カードだ、アルトリア・ペンドラゴン、アルクエイド・ブリュンスタッフ。と言うかペンドラゴンってことはセイバーはアーサー王か？」

「何で私の名前を！？」

「アルトリアだっけ？ よく見なさい。今渡されたカードに名前が書いてるわ」

「あ」

「ところでアルクエイドに一つ質問だ。真祖の姫つて何なんだ？」

「私は真祖の吸血鬼なのよ。それに私はアリストテレス、タイプ・ムーンの転生先の最有力候補だから姫なんて言われているのよ」

「アリストテレスとかは放つておくとして、真祖の吸血鬼つてのは吸血鬼の弱点が無くなつた吸血鬼だったか？」

「何それ？ 真祖の吸血鬼つて言うのは人間に対しても直接的な自衛手段を持たない星が、人間を律するために生み出した『自然との調停者』、『星の触覚』。人を律するものならば人を雛形にと言うことで精神構造・肉体共に人間の形をしているけど、分類上は受肉し

た自然靈・精靈にあたるものよ。星からのバックアップも受けられるしね。まあ、私は太陽の光位なら大丈夫だけど」

「そりか。ならバックアップを受けられるまま星からの命令を聞かなくていいようにして、吸血鬼の弱点を無くしておくれか」

俺は能力を発動して『概念』を書き換える。

「よし、終了。なら次は2人の質問を聞いて。ちなみに令呪は無いぞ」

「どう聞ひますか?」

「術式を変えた時にいらないから無くした。攻撃されても平氣なのはさつきのでわかつただろ?」

「ええ、そりね。なら、さつき吸血衝動を無くしたのと弱点を無くしたの。何をやつたの?」

「俺の能力を使つたんだ。俺は『あらゆる干渉を否定』できるからな。それでこうしたいと言つ『我を通』したんだ」

「なら次は私が。このカードは何なのですか?」

「それは仮契約カードと言つて従者に与えられるものだ。効果としては従者への魔力供給、俺の場合は供給の強化だな。それと至近距離での召喚。まあ、これは必要ないな。効果がありそうなのは、衣装の登録、防御力上昇。それとアーティファクトだな」

「アーティファクトとは?」

「魔法道具、そつちの世界だと多分魔術礼装だつたかな。それと似たようなもんだ」

「なら、最後。零は何者?」

「俺はお前達の世界でもこの世界でもない世界の神。『操神』天伎零だ」

「そう、分かったわ。でも、まだせつきのキスのことが残っているわよ」

「え?」

「そうですね。無理やり唇を奪つたんです。それについてせつづけ考えですか?」

「え、えーと。と、とりあえず、アーティファクトの確認をしようか」

「逃げたわね」

「逃げましたね」

「いいからカード貸して!」

アルトリア・ペンドラゴン

数字 ?

色調 金

徳性 正義

星辰性 流星

方位 中央

称号 鮎りし騎士王

アーティファクト 選定の鞘

アルクエイド・ブリュンスタッド

数字 ?

色調 虹

徳性 希望

星辰性 地球

方位 中央

称号 原初の一

アーティファクト 世界の代行者

「何か凄いな。って、どうした？」 アルトリア

「いえ。ただ選定の剣である『勝利すべき黄金の剣』は既に失われていますから」

「もしかして『全て遠き理想郷』もか?」

「はい」

「よし、ならわつきの償いに俺が用意しよう」

「え?」

「『全ての干渉を否定し、無くなりし存在を有へ』」

すると俺の手の中に剣と鞘が現れる。ついでにアーティファクトの情報も集めるか。

「なつ、これは…」

「はい、どうぞ。オリジナルと全く違つていない筈だ」

「ありがとうございます!」

「それとそのアーティファクトの効力は『勝利すべき黄金の剣』を出しておる時に限り、あらゆる力を吸収し、自分の力にする物らしい。それとアルクエイドの方は星からだけでなく世界からもバックアップを受けられるようになるらしい。呼び出すときは『来たれ』、しまつときは『去れ』だ」

「分かりました(分かったわ)」「

「それで、2人は何で聖杯戦争に？」

「私はただ星の触角として過^ハしてただけよ」

「私は……」

「ん、どうした?」

「私は、聖杯に選定のやり直しを願おつとしたんです」

「そりや、何でまたそんなことを」

「私が王にならなければもつといい未来が待っていた筈なんですよ」

「そんな訳がねえだろ」

「ツー」

「選定の剣に選ばれた時点でお前が王として一番相応しかったってことだ。それによ、俺も人だった頃に王みたいな立場にいたことがあつたがそんなことは一度も思わなかつた。だって、失礼だろうが。自分が殺した奴にも、自分の指示で死んだ奴にもさ。第一お前は英雄として今も語り継がれているんだ。少なくとも周りの奴らはお前のことを認めてるんだよ」

「……私がやつたことは、無駄じやなかつたのですか?」

「ああ。決して無駄なんかじやなかつたんだよ」

「へへ、うう」

そして、アルトリアは泣き始めた。今まで背負つてきた憑き物を一緒に流すかのよつこ。しばらくするとアルトリアは泣き疲れたのか眠ってしまった。

「あ～あ、私空氣だつたな～」

「うつー！」

「まだ何もお礼を貰つてないのにな～」

「う～、あ、そうだ。なら俺の血を吸つていいぞ。知り合いの吸血鬼によると結構美味しいらしいからな」

「いいの？ 零が死徒になつちゃうけど」

「俺の能力があるから大丈夫だ」

「あ、そつか。じゃあ、遠慮なく。いつただつきま～す」

そう言つて俺の頸筋に噛みつくアルクエイド。その状態で3分ほど経過して、ようやく口を離してくれた。

「何これ、すげく美味しい！ 病み付きになりそうー！」

「そつか、そりゃ良かつた。つと、起きたか？ アルトリア

「ええ、ありがとうございました」

「いや、いいよ。何せ大切な従者だからなかぞく」

「か、家族ですか！？」

「ん？ ああ。この場合の家族つてのは俺の大好きな奴らってことだ」

「そ、そうですか」

「何か落ち込んでないか？」

「い、いえ、別に何でもないです！」

「そ、そつか」

いきなり元気になつたな、おい。

「ねえ、零。私は～？」

「お前ももう家族だよ、アルクュイド」

「それならさ、もっと碎けた呼び方で呼んでよ

「それじゃあ、アルク。これからよろしくなー 後、リアもよろしくー」

「リ、リアですか！？」

「駄目だったか？」

「い、いえそんなことはありません。よろしくお願いします。れ、

零」

「えー。」

ドオオオオン！

「何だ？」

「森の方から聞こえましたね。行ってみましょー。」

しばらく進んでいると森の一角が燃えていたのが分かった。

「おい、いたぞ！」

「見ろ！ ガキだ！」

「ひつやいや、上玉だぜ」

「ガキの角は柔らかいつてんで、また高値がつくんだよなあ

「まったく、下種な人達ですね」

「本当。思わず殺したくなっちゃうわ

「お前達、誰だ！」

「誰？ 僕は『幻想神』だよ」

「な、何でこんなとこに英雄がいるんだよ

「どうあれ、報いを受けようか」

俺は『大地』を操って、全員の心臓を貫く。

「大丈夫だったか？ 嬢ちゃん」

「え？」

「どうあれ、聞くが生き残りは他にいるか？」

「……（フルフル）」

「しょうがない。なら一緒に来るか孤児院に行くが、どちらかを選べ」

「……一緒に行く

「やうか、名前は？」

「……ブリジット

「そつか。俺は天伎零。こつちはアルトリアとアルクエイド。よろしくな、ブリジット」

「……うん」

「じゃあどうあれ田世界に行くだ」

「田世界ですか？」

「ああ、2人は知らなかつたな。ここは魔法世界と言つて、火星に造られた人造世界なんだよ。それに対して地球が旧世界と呼ばれるんだ」

「……亜人は、何故か旧世界にいけないから無理です」「

「大丈夫、俺の手にかかれば亜人でも旧世界にいける。まあ、もちろん『認識阻害』の魔法は使うけどな」

俺は『現実と幻想の境界』を操つて、ブリジットを現実の存在にする。

「それじゃあ、旧世界に行くぞ！」

俺は全員の下に『スキマ』を開き、旧世界に向かう。……ああ、旧世界に行つたら全員の戸籍を作らないとな。

そして物語は加速する。

ep・? (後書き)

ep・?、終了しました。

今回は零の従者召喚の話でした。それに加え、零無双。今回からタグにFateが加わったので、その説明も省きます。

今回出てきた技はこじりです。

・我が名は～守り手よ！……虚無の属性がある世界のサモン・サーヴァントにFateのサーヴァント召喚を繋げただけ。

・太極法……咸卦法の最上強化版。他にも氣、魔力、神力か靈力、妖力、神力で行う四象法しじょう、氣、魔力、靈力、妖力で行う両儀法がある。強化の具合は咸卦 < 四象 < 両儀 < 太極の順。

・溟穹一閃……数多の戦いの中で竜殺し等の殺しの概念全てが付与された穹と溟に太極法と同じ強化を行い斬撃を繰り出す。これが零の真名解放に当たる。

・操神結界・本章……対物・対魔結界を交互に4重張り、中にいる者を回復させる。

・我が名は～仮契約……これも虚無の属性のある世界のコントラクト・サーヴァントに仮契約の文字を加えただけ。

次回の更新をお待ちください。

interval・?（前書き）

フイリスです。interval・?を更新しました。

今日は幕間と言ひ感じです。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしませんが、温かい田で見てください。

interval ·?

今私はあり得ない光景を目にしています。私の前で神を召喚のお爺さんが土下座しているんです。

「本つ当に、すまなかつた！」

「えーと、何がですか？」

「お主は本来、死ぬ運命になかったのじゃよ」

ああ、よく零君が読んでいた転生モノと言つもののトシングフレですね。つてあれ？

「私の死因は自殺だつたと思うのですが？」

「ああ、そうじや。儂自身、お主には何の失敗もしておいらん。じゃが、お主が自殺する切欠を作つたのが儂なんじやよ」

私が自殺した切欠つて……

「零君に何かしたんですか！？」

「うむ。それはの「この駄神がスカートめくらをじょりとじて起こした風で看板が飛んで天伎零は死んだのですよ」天照ーー。」

いきなり現れたこの女性は誰でしょうか？　まあ、今はそれより。

「どう言つてですか、駄神？」

「いきなり駄神！？」

「貴方なんて駄神で十分です。で、零君はどうなったんですか？」

「ええ、責任を持つて転生させました」

「じゃが、人が誤つて死んだことで他の者の運命まで狂うとは思わなかつたんじやよ。それで責任を取つてお主も転生させることになつたんじや」

「なら零君のいる世界にお願いします」

「残念ですが、それは無理なんです」

「何ですか？」

「私たちには『元を元にした世界』と言つ大きなくくりなら送れるけど、『がいる世界』と言つピンポイントでは送れないの。それにそつちの世界とは時間の流れる速さが違うから零殿は今は神になつて、色々な世界に行く仕事をしているのよ。だから私自身念話はできるけれど特定の世界には送れないわ」

「そう、ですか」

「ならば基点世界に転生させればいいんじやー、儂天才ー！」

「基点世界には転生者は送れないでしょうが、駄神」

「あ、そうじやつた」

「まあ、そう言ひ訳で貴方には特典をいくつか差し上げて転生してもらいます。それでも、貴方は直接の被害者ではないから2つ程しか上げられないんだけどね」

「うーん、2つか~。1つは決まりとしてもう一つは何にしよう。…あ、そう言えば零君が『こんなのがあつたら凄い』って言つてたのがあつたつけ。

「じゃあ、まず一つ。どんな家庭に転生しても、絶対に生き延びられる力をください」

「ええ、分かりました。で、もう一つは?」

「え~っと、Fateとか言つんだっけな。そのスキルの強化版の『直感：A+』をください」

「はい、これで完了です」

「いつも言えれば私つてどこの世界に転生するんですか?」

「え~っと、ネギまの世界ですね」

良かつた。零君に借りてよく読んでたから、どんなことが起きるか分かるよ。

「それでは、良い人生を」

- - - - -

そんなことがあって転生したのはいいけど、まさか主人公の双子の妹にだなんて。でも、私の直感が囁いてる。零君にまた会えるつてもしかしてこの世界に来るのかな?

「シズク、あなたはどうちだと思つのー。」

「お父さんは来てくれるよねー。」

あ、シズクってこののは私の名前です。転生前の名前と一緒に嬉しいですね。

「兄さんは悪いですけど死んだりしないと感じますよ。」

「せり見なさい、シズクだつていつまでもいるじゃないー。」

「お父さんは来てくれるもん」

まあ、来てくれるでしょうね、死んでませんし。

「まあ、いいわ。はいこれ。ネギヒシズクにあげるわ」

「これは?」

「初心者用の練習杖ですよ、兄さん」

「そ。あんた達も来年から学校来るんでしょう。生きてた頃のお父さんみたいになりたかつたら、ちよつとは練習しておきなさい。」

ふう、とつあえず隠れて練習してみますか。まあ、兄の奇行を止め

なければいけませんけどね。

「うわら私は火と水、それに治療系の魔法に適性があつたようだ。
主にそれを練習しています。

「シズク、今日はネカネお姉ちゃんが帰つてくる日だから早く村に戻るうー。」

やつでしたね、つむなら今日が悪魔の襲撃がある日ですかー!?

「兄さん、早く戻りますよー。」

「え? う、うんー。」

私は走つて村まで行きましたが、どうやら一足遅かつたようです。

「ネカネお姉ちゃん! おじせーん!」

「あ、兄さん! 何処に行くんですかー。」

くつ、兄さんはぐれてしましましたか。

「クカカ、また1人発見だ。お前も石になれ!」

ツ! 兄さんを探すのに夢中で気が付きました。しかし、自分の身を守るために突き出した手に魔法が触れた瞬間、魔法が消滅しました。

「これは……魔法無効化能力ですか」

確かにこれがあれば大抵の場合生き残れますね。まあ、飼い殺しにされる確率も上がりましたが。

「な、何をした貴♂」

その瞬間、目の前にいた悪魔を魔法が飲み込みました。おそらく今のは『雷の暴風』。なら、父は向こうですか。そう思いしばらく歩いて行くと、父が兄に杖を渡していました。

「お、お前がシズクか。ほんと、俺じゃなくアイツに似たな」

向こうも私に気付いたようです。本当に、私は母に似ていますよね。

「お前には、杖は無いけどこの指輪をやる。杖と同じ位の発動体だ」

「ええ、ありがとうござります、父さん」

「悪いな、お前達には何もしてやれなくて。こんなこと言えた義理じゃねえが、元気に育て。幸せにな！」

「お父さあーん！」

ふつ、良質の発動体も手に入つたことですし、次からはもっと高位の魔法の練習をしますか。幸い、兄について行けば禁書は見放題ですからね。

interval・?（後書き）

interval・?、終了しました。

他の転生者が現れました。零が転生する前の幼馴染ですけどね。

つい先程、『概念』と『能力』の違いについて、友人に尋ねられました。一応私の解釈では、『概念』は道具や種族が持つ物。『能力』はその個体のみが持つ力というものです。

次回の更新をお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0348u/>

ネギま！～至りし者魔法ある世界へ～

2011年10月10日15時17分発行